

的変化を、肉眼的および顕微鏡的立場から調べ、その大きさや重量が春、秋の候に頂点を作り、夏、冬の候に谷をなす 2 山型の変化をすることを知った。

今回は雌性生殖腺について同様なことを試みた。すなわちヘマトキシリン・エオジンで二重染色した卵巣の連続切片を鏡、マイクロメーターで卵巣の大きさ、卵胞の大きさを測定した。その結果これらの大きさは雄よりも 1, 2 カ月遅れて頂点が見られる 2 山型の変化をすることを知った。谷にあたる点は雄と一致して 1 月と 7 月であった。

生後 10 日令の幼仔の卵巣には、2, 3 層の卵胞細胞層を有する卵胞が、日令 50 日のものでは大きな卵胞があるが、未だ空胞は生じない。老令のものには結合組織と、卵細胞を欠く小さな退化卵胞を多数認める。

黄体の数 (13 例) は左右の卵巣を合わせて最大 14, 最小 3 個、懐胎数は 5 および 6 であった。

志賀高原におけるネズミ相の 季節的变化 (予報)

宮尾嶽雄・赤羽啓栄・酒井秋男・大石康弘・
小穴広光・西野武久・山下幹夫・柳平坦徳
(信州大・医・解, 信州大・教・生)

1) 1962 年 10 月および 1963 年 4—8 月にわたって本州中部上信越高原国立公園の中心地である志賀高原において、ネズミおよび食虫類の採集を行なった。2) この地域にはドブネズミが圧倒的に多く採集総数の 49.5% を占め、そのほかヒメネズミ、アカネズミ、ヤチネズミ、ハタネズミ、ヒミズ、ヒメヒミズ、トガリネズミがみられた。3) ドブネズミは旅館やヒュッテが存在する地域にはどこにもおり海拔 2300 m の横手山山頂にも分布する。4) ドブネズミはいずれの地域においても夏から秋にかけて著しく個体数を増す。5) ドブネズミの越冬個体は中等度の個体から成り、春早くより繁殖を開始し、少なくとも秋までは続く。6) ドブネズミでは精巣の大きさに季節的变化がみられないが、アカネズミ及びヒメネズミでは 8 月以後著しく精巣は縮小する。7) 志賀高原には局部白変型のドブネズミがしばしばみられる。

本州八ヶ岳低山帯及び亜高山帯の ネズミ及び食虫類

宮尾嶽雄・両角徹郎・両角源美・赤羽啓栄・酒井秋男
(信州大・医・解, 長野・岡谷南中, 長野・岡谷西中,
信州大・教・生)

1962 年 4—12 月及び 1963 年 1—10 月にわたって、本州八ヶ岳の小哺乳類の採集を行なった。低山帯草原にはハタネズミ、潤葉樹林にはアカネズミ・ヒメネズミ・ヒミズがすむ。亜高山帯森林にはヤチネズミ・ヒメネズミが多く、スミスネズミ・ヒメヒミズ・トガリネズミがすむ。スミスネズミは局所的に集中した分布を示す。ヤチネズミ・ヒメネズミとも 7—8 月を除いて雄が多くとれる。また、繁殖は 6 月をピークとする年 1 回で、精巣は 9 月以後著しく大きさを減ずる。亜高山帯においては、春—夏にはヒメネズミが、秋—冬にはヤチネズミが多くとれる。平均胎仔数は次の如くである。アカネズミ 5.7, ヒメネズミ 4.0, ヤチネズミ 3.1, スミスネズミ 2.3, ハタネズミ 4.2, ヒミズ 4.5, ヒメヒミズ 3.7, トガリネズミ 4.4。スミスネズミの乳頭式は 1+0+2 又は 0+0+2 であるが、1963 年には後者の乳頭式をもつ個体が多く、胎仔数は減少した。

中部山岳北アルプス産の食虫類について

植木忠夫 (富山大・文理・生)

演者は、今泉吉典氏らと立山山系およびその周辺地域産食虫類の調査を実施した。

トガリネズミ科に属するものには、シロウマトガリネズミ・アズミトガリネズミ・ホンシュウトガリネズミ・アカイトガリネズミの 4 種類、モグラ科に属するものには、ホンシュウヒミズ・ヒメヒミズ・ミズラモグラの 3 種類が採集された。

これらのうち、ヒメヒミズのような移動性の弱い原始的な種類は、中生代や先中生代のような比較的古い地質地域のみ出現しており、移動性の強いトガリネズミのなかまは、第四紀または第三紀のような比較的新しい地質地域と古い地質地域とに出現した。

大日岳産のヒメヒミズは、尾率が 64—68 にも達

しており、針の木谷産のアズミトガリネズミは、別種ではないかと思われるほど、頭骨のずばぬけて大きいものが採集された。

太郎山では、9月24日(1962)に妊娠個体例が得られた。

無人島に放された豚の野生化について

影山藤作(国土館大)

明治33年官幣大社台湾神社奉祭の時、同大妃北白川宮が御参列の帰途、琉球に御立寄られ、豚を受けられ、御召艦吉野にて御生家宇和島湾に入らる。伊達宗陳候これを愛媛県西海町鹿島に放つ。その豚の性質が野生化して、人が近づけば、おそいかかるに至れり。豚は野猪を人が飼育して、家畜化したものという。野猪が人にかかる場合は、一応手傷を受けたものと、仔を連れてくるものは危険なりという。今この鹿島に放たれた豚は撃たれたということもなく、仔を連れてくるというのではなく、人にかかるという。これは野猪と雑種となり、荒くなりたるためと推定し、伊達候より余に贈られた其頭部、前肢、後肢、尾を見たる所、毛色は純黒にして、頭骨は矢張豚型であり、雑種という点は判然とせず、これは人家から離れて生れ、未だ人を見た事なき仔豚が、人を恐れてとびかかるようになったものか、また人に捕えられた経験によるものかと考えらる。

エゾヤチネズミのとれ方

太田嘉四夫(北大・農・応用動)

北海道釧路国標茶町附近の国有林造林地内に面積1haの野外飼育場をつくり、その中にエゾヤチネズミを放飼して、1959年夏より1963年春まで、半自然個体群の生存と繁殖について研究した。原則として月1回、3—6日間の生捕りによって現存数の調査を行なった。ネズミのとれ方はつぎのようであった。1) ワナ経験のあるものは未経験のものよりワナにはいりやすい。2) 繁殖期には後になって若いものが捕れてくることがあり、餌づけ法によっても捕獲率を一定にすることは難しい。3) 3—6日のワナかけで得られるネズミはその時に乳ばなれしてい

る個体以上の生長段階のものだけである。このようであっては毎月の捕獲数からだけで生存曲線や生命表をつくることはできない。捕えられたネズミの体重および月々の雌の妊娠、出産、哺乳の状態とから、各ネズミの出生月を推定すれば、ある月に存在した乳ばなれ以上の段階のネズミの総数を推定することができる。

高知県宿毛地方のドブネズミ 大発生個体群の特質

田中 亮(高知女子大・動)

本地方のドブネズミ大発生は、1949年愛媛県戸島に始って、その後慢性的症状を呈する同県西南海岸地方の鼠禍の南遷拡大現象とみられる。従ってこれは四国西南部海岸地方に共通な生態系と住民の生活様式に深い関連のある風土病的性格のものである。

本地方では特に宿毛湾の大島に著しい鼠禍がみられ、1963年頃ピークに達した。演者は1963年2月の一斉駆除の際大島から収集した資料を解析した結果、個体群は愛媛県のそれに比して、ドブネズミのみよりなることと体重構成が大きい傾向のあることが特異的であり、大発生個体群としては悪性であることが判った。一斉駆除による毒死及び捕殺個体数から、駆除前に1戸当り10頭の密度と推定され、これは平常密度の約10倍とみられる。それに相当して個体群の副腎重量準位も高かった。一斉駆除の効率は92%と見積られ、その後の実績はこれを反映して被害は激減したが、その後またふえだしたようである。

大雪山の蚊の活動性

佐藤正三(北海道学芸大・旭川・生)

1961年の6月から10月にわたり、大雪山系のひさご沼、天女ヶ原、姿見の池の各地において、人の入っている蚊帳内に来集する蚊を1時間毎に捕え、その種類と数とを調べて次の結果を得た。1) *Aedes communis* トカチャブカ, *A. punctor* チシマヤブカ, *A. diantaeus* ヒサゴヌマヤブカ, *Culiseta kanayamensis* ミスジハボシカ, *A. esoensis* エゾヤブカの5種類が得られたが、総じて最も多いのは